

〈第5章 熊楠の採集・観察行為〉

小生は元来はなはだしき疝積持ちにて、狂人になることを人々^{うれ}患えたり。自分このことに気がつき、他人が病質を治せんとて種々遊戯に身を入るるもつまらず、宜しく遊戯同様の面白き学問より始むべしと思ひ、博物標本をみずから集むることにかかれり。これはなかなか面白く、また疝積など少しも起こさば、解剖等微細の研究は一つも成らず、この方法にて疝積をおさうるになれて今日まで狂人にならざりし。

[1911年10月25日付柳田国男宛書簡] (『全集8』p.211)

第1節、熊楠にとっての「採集（収集）」と「観察（写生・記録）」の意味

筆者は第4章において、熊楠は対象へ「indwelling（内在化）」していた、と述べた。対象を観察する熊楠は、瞬間的にその対象と一体化していたと考えられる。そして、対象の「諸細目（諸情報）」を掴み取り、自己へ戻って来たとき「ひらめき」は生じた。熊楠は、その「ひらめき（直観）」を信じることによって、さまざまな事柄（例えば珍種の生物など）を発見する（「やりあて」る）ことができたのである。

本章では、熊楠の「やりあて」、特に、筆者が言うところの「熟練能的tact」による「やりあて」を考察する際、欠かすことのできない事柄——熊楠（自己）と対象（他者）の在り方——について述べる。そして、「採集」と「観察」という行為を通じて、南方熊楠という人物そのものに迫りたい。

※

熊楠は、生物はもちろん、さまざまな珍品・奇品、あるいは文献や伝承などの「採集（収集）」に莫大なエネルギーを費やしている。特に、粘菌や隠花植物の採集に対する情熱は、超人的であったとさえ言える。現在保存されている熊楠が集めた標本は、シダ 190 種、藻 325 種、粘菌 6,000 種、キノコ 6,575 種に及ぶ。そこには単なる「コレクター（収集家）」の域を超えた何かを感じさせるものがある。また熊楠は「観察（写生・記録）」にも固執した。驚異的な集中力と持続力で観察し、写生・記録を行った。熊楠の描いた菌類彩色図譜は約 3,500 枚に及ぶ。粘菌の図譜も相当数描いたようだが、それらは不幸にも精神を病んでいた息子・熊弥によって修復不可能なまでに破棄されてしまったという。¹⁾

執念とさえ思える「採集」行為と、粘着的とさえ言える「観察」行為。南方熊楠という人物を特徴付ける、これら二つの行為から、我々は何を知ることができるだろうか。本章

¹⁾ この点に関しては異論を唱える研究者もいる。例えば、長谷川興蔵と中沢新一は対談で、以下のように述べている。

長谷川：……粘菌図譜はまず間違いなく最初は熊弥さんが相当破棄したんだろうと思います。ただ、ご本人が、つまり南方熊楠自身が破棄するという意図がない限りは、あんなに何もかも残らないはずはないんです。

中沢：あれを熊弥さん一人で全部破棄するには超人的な体力がいるでしょう。

長谷川：体力と専門知識がいる。

中沢：偏執狂的な丹念さも必要です。あの頃の熊弥さんの精神状態からすると、こういうことはできないんじゃないかと、僕も秘かに疑いを抱いていました。

長谷川：熊弥さんの事件がショックになって、南方さん自身が破棄したんだと思いますね。でなければ、いくら探しても一枚もないはずはない。

[中沢・長谷川 1992:199]

では熊楠と粘菌の関係を軸に、彼の「採集」と「観察」について、精神分析学における「取り入れ同一化 introjective identification」と「投影同一化 projective identification」を手がかりに考察していく。

以下ではまず、熊楠にとって「採集」・「観察」とは、どのような意味を持つものだったのかを述べる。そして本章を進めていく上で、キーワードとなる「取り入れ同一化」と「投影同一化」について解説する。その上で「採集」と「取り入れ同一化」、「観察」と「投影同一化」の関係を、図を用いて考察する。そして次に、熊楠が対象（粘菌）に何を見ていたのかを C.G.ユングの「元型論」を基に述べる。さらに熊楠と対象との「同一化（統一）」と「分裂」、「区別」について、ヘーゲルの「無限性 die Unendlichkeit」をヒントに考える。最後に、熊楠と対象の「距離」に関して述べる。日本民俗学の父・柳田国男によって「日本人の可能性の極限」とまで評された南方熊楠という人物の特異性、あるいは彼が天才・超人と言われる所以は、対象との「距離」の採り方にあったと思われる。

熊楠が「採集」・「観察」行為に超人的なエネルギーを費やした理由は何だったのか。当然、「日本の菌類 7,000 種を採集して、カーチス、バーレーをしのぎたい[鶴見 1981: 60]」や「おもしろくてたまらないから[鶴見 1981: 68]」といった理由だけでは不十分である。熊楠にとっての「採集」・「観察」の意味を考察することは、南方熊楠という人物そのもの、また彼の人格の根底にかかわる最も重要な事項であり、決して素通りすることはできないものなのである。

なぜ熊楠は膨大な数の粘菌や隠花植物の新種を採集しながらも、「裸名（学会誌に未発表の彼独自の分類番号）」のままにしたのか。なぜ粘菌や隠花植物に関する知識を広めるための本や論文をもっと発表しなかったのか。論文がほとんどない以上、熊楠を「植物学者」と呼ぶべきではないのではないのか。熊楠が正式な分類法にのっとなって記録しなかったのは、あまりにも無責任ではないか。²⁾

²⁾ 牧野富太郎(1862~1956年)は、
植物ことに粘菌については、それはかなり研究せられた事はあった様だが、しからばそれについて刊行せられた一の成書かあるいは論文かがあるかと言うと私は全くそれが存在しているかを知らない
[牧野 1942, 飯倉・長谷川 1991 所収:309]

と述べ、山本幸憲は、
私が思うに、まず最大の欠点に、自分で多くの新種名をつけておきながら、裸名で残したことが挙げられる。これは無責任である。

[山本 2005, 松居・岩崎 2005 所収:86]

と述べている。

これまで熊楠に対するこのような議論や批判が繰り返行われてきた。しかし、そもそも熊楠にとって「採集」や「観察」は、業績を残す為や名声を得る為のものではなかった。熊楠が「採集」と「観察」に固執した本当の理由、それは彼自身によって端的にそして赤裸々に、以下のように述べられている。

小生は元来はなはだしき疝積持ちにて、狂人になることを人々^{うれ}患えたり。自分このことに気がつき、他人が病質を治せんとて種々遊戯に身を入るもつまらず、宜しく遊戯同様の面白き学問より始むべしと思ひ、博物標本をみずから集むることにかかれり。これはなかなか面白く、また疝積など少しも起こさば、解剖等微細の研究は一つも成らず、この方法にて疝積をおさうるになれて今日まで狂人にならざりし。

[1911年10月25日付柳田国男宛書簡] (『全集8』p.211) (傍線—唐澤)

上記書簡で「小生は元来はなはだしき疝積持ちにて」また「自分このことに気がつき」と述べられていることから分かるように、熊楠は自身の自我の不安定さを自覚していた。そのような熊楠にとって、「採集」(博物標本をみずから集むること)と「観察」(解剖等微細の研究)は、自我が崩壊し「狂人」になることを怖れての、いわば「防衛機制 defense mechanism」³⁾であった。

熊楠の「採集」は、「防衛機制」の一つである「取り入れ introjection」に、「観察」は同じく「投影 projection」に深く関連している。では、なぜ熊楠は自分の中に対象を取り込んだり、自分を対象へ投げ入れたりしたのだろうか。

それは端的に、欠けるところの無い安定した、完全な理想の自己像を求めてのことであったと思われる。

熊楠は、自身に欠けた部分、あるいは自分で認識している表面上の性質とは正反対の性質などを採集・観察対象に見出し、それらと一体化しようとした。それは不安定な自我の「防衛機制」であり、対象と一体化あるいは同一化し、自分に欠けた部分を補完することで安定を図ろうとする人間の心の機能 (function) でもある。不安定な自己は対象におい

³⁾ 「防衛機制」とは、S.フロイトによって提唱された概念である。それは精神的安定を保つための無意識的な自我の働きとされ、「取り入れ」や「投影」以外では、例えば「抑圧」・「転換」・「隔離」・「反動」・「退行」などがある。

て、自己自身の欠如した部分を見る。対象の内に、本来自己自身の本質に属しながらも自己に欠けているものを見出す。そして「取り入れ」や「投影」を通じて、自己の欠けた部分をもつ対象と一体となることで、完全性を希求するのである。

しかし、もし熊楠が対象と完全に同一化し、そのままの状態に留まっていたら、彼の自我は消滅し、逆に「狂人」になっていたに違いない。完全な同一化は、自我の消滅・主体の無化・人格の死を意味する。つまり自分の欠けた部分を補う点において同一化は理想とされ、目指されるべきものであるが、一方で主体が完全に対象と同一化しその状態に留まることは、主体の無化・人格の死を意味し、忌避されるべきものでもあるのだ。

熊楠は、あらゆるものを「採集」し「観察」した。彼の目指すものは、まさに「一切智」（全てを知ること、あるいは全てを知る人）であった。しかし「あらゆるもの」と言っても、そこにはやはり、ある種の傾向が見られる。粘菌を始めとして熊楠が好んで研究対象としたものは、どれをとってみても、いわば「熊楠的」もしくは「粘菌的」なものばかりであった。曖昧で猥雑で非合理的——このような特性を持つ対象を熊楠は非常に熱心に研究した。そしてそれらを採集し、あるいはそれらに関する伝承や文献などを渉猟し筆写・記録した。

つまり熊楠は対象を通じて、（曖昧で猥雑で非合理的な）自分自身を見ていたと言えるのではないだろうか。しかし熊楠は、自分自身を科学的・論理的思考の持ち主、また合理主義者だと考えていたふしがある。彼を「曖昧・猥雑・非合理的・没論理的」な人物だと考えるのは、特に後世の我々であり、決して彼自身が最初からこのことを自覚していたわけではなかった。これらに関しては本章・第3節で述べることにする。

第2節、「取り入れ同一化」としての「採集」、「投影同一化」としての「観察」

熊楠は「採集」・「観察」を通じて、対象と「同一化」しようとしていた。しかし一言に「同一化」と言っても、そのプロセスにおける方向性は異なる。つまり熊楠の「採集」は、対象を主体に取りこむこと（対象の主体化）による「同一化」＝「取り入れ同一化」であり、「観察」は、主体を対象へ投げ入れる、つまり主体が対象へ入りこむこと（主体の対象化）による「同一化」＝「投影同一化」であると言えることができる。「投影同一化」とはメ

ラニー・クライン (Melanie Klein 1882~1960 年) よって提唱された概念である。そしてそれと一対をなすものが「取り入れ同一化」である。

ここで簡単に、「取り入れ同一化」と「投影同一化」について説明しておく。

「取り入れ同一化」とは、端的に言えば、対象を自己に取り入れて融合し、そうすることで満たされない感情を満たそうとする心の働きと言える。また精神科医・小此木啓吾は、「取り入れ同一化」は、フロイトの言う「自己愛的同一視 narcissistic identification」とほぼ同じことであると説明している[小此木 2002: 165-166 参照]及び[氏原他 1992: 1004 参照]。

では、その「自己愛的同一視」とはどのようなものか。それは、

自他の識別が成立した後に、対象そのもの、あるいは対象の特性を自己の中に取り入れて自己の一部とみなす同一視

[氏原他 1992: 1003]

であるという。因みにフロイトによると、この同一化は、性的発達段階における最初の口唇期の流れをくんでおり、渴望し尊重する相手を食べてしまうことによって、その対象を自らへと同化してしまう心理に由来しているという。

一方、「投影同一化」とは、

……対象に自己を投影し、投影された自己と対象とを同一視する機制である。もう少し具体的に言うと、自分の心の中の願望や衝動を自らの中から排出して、相手に投げ入れ投影し、あたかもその相手がある願望や衝動を抱いているかのように知覚する仕組みである

[小此木 2002: 165]

と言われている。つまり、対象の中に自己が意識していないような部分を投影し、その対象と同化しようとする心の働きと言うことができるであろう。また精神分析家のドナルド・メルツァー (Donald Meltzer 1922~2004 年) は、「投影同一化」を「侵入的同一化

intrusive identification」(傍点一唐澤)と呼ぶべきではないかと提案している[氏原他 1992:983 参照]。因みに、日本神話・民俗学の研究者であるカーメン・ブラッカー(Carmen Blacker 1924～2009年)は、論文「南方熊楠 無視されてきた日本の天才」において、

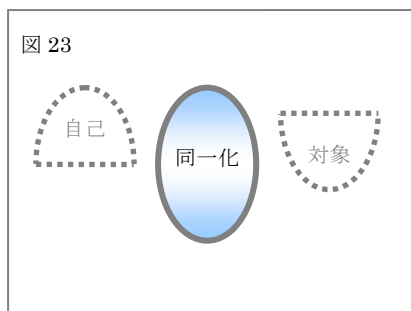
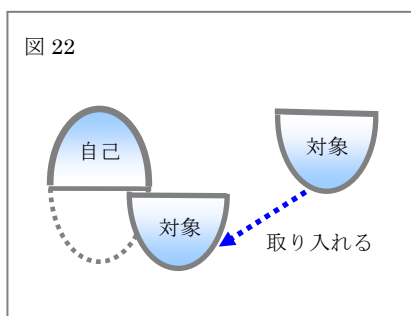
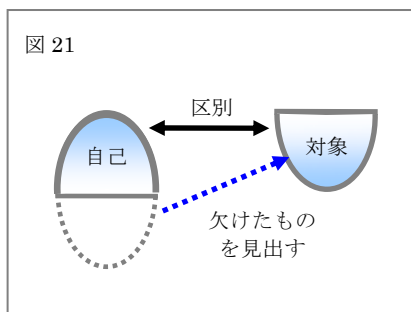
南方の動機は、昆虫や、鳥、獣、植物、菌類のかたちをとった生命というものに対する、無私無欲の没入だったように思われる。

[Blacker, 高橋訳 1983, 飯倉・長谷川 1991 所収:460] (傍線一唐澤)

と述べている。

つまり「取り入れ同一化」が、自己に対象を「摂取」するのに対し、「投影同一化」とは自己を対象へ「投げ入れる」こと、自己が対象へ「侵入する」ことだということもできるだろう。

以上を踏まえた上で、以下では「取り入れ同一化」と熊楠の「採集」、「投影同一化」と熊楠の「観察」の関係を、図を用いて考察していく。



〔図 21〕から〔図 23〕は、「取り入れ同一化」の過程を示したものである。まず、対象と区別されてある自己は、自己自身の欠けている何かを対象に見出し〔図 21〕、それを取り込もうとする〔図 22〕。そして自己は対象を取り入れて同一化し、心の安定を図ろうとする。しかし対象を完全に取り込み同一化し、その状態に留まることが、自己と対象が共に消えてしまうことを意味する〔図 23〕。

熊楠の「採集」も、この「取り入れ同一化」と同様であると考えられる。例えば、熊楠と粘菌の関係で考えてみると次のようになる。まず熊楠は粘菌に自身に欠けているもの、あるいは正反対のものを見出し〔図 21〕、それを「採集」することで自身に統合しようとした〔図 22〕。

自己(熊楠)が対象(粘菌)を取り込もうとするのは、

あるいは取り込めるのは、自己が向かい合っている対象が、もともと自己そのものだからである。自己（熊楠）と対象（粘菌）は、そのような（もともと統一された完全な状態が分裂した）関係においてある。「同一化」とは両者が一つの場に溶け込むことでもある。そして溶け込んで一つになった場には、もはや自己も対象もない〔図 23〕。

〔図 24〕から〔図 26〕は「投影同一化」の過程を表したものである。自己は自分の心の中にある願望や衝動を対象に投影し、あたかも対象がその願望あるいは自己の欠如した部分を持っているかのように知覚する〔図 24〕。そしてその対象と同一化するために対象へ自己を投げ入れる〔図 25〕。自己と対象が完全に同一化すると、自己と対象は溶け合い消える〔図 26〕。

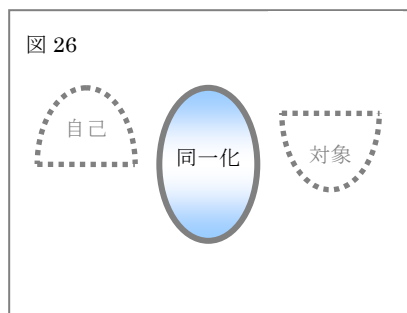
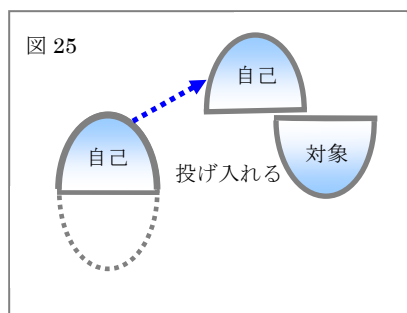
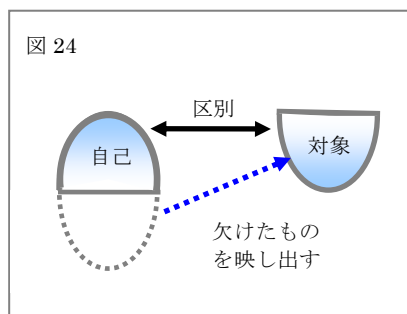
これも熊楠と粘菌の関係で考えてみると、次のようになるだろう。熊楠は粘菌に自分の願望や衝動（これらについては次節で詳述する）を投影していた〔図 24〕。そして熊

楠は粘菌へ入り込むように「観察」を行うことによって、それと同一化しようとした〔図 25〕。また熊楠と粘菌が完全に同化したとき（場に溶け込んだとき）、両者はもはや存在しない〔図 26〕。

ここで、さらに考察しなければならない事柄が、主に二つある。

- ① 熊楠が「採集」「観察」した対象（粘菌）に見出していた自身の願望・衝動・欠如した部分とは何か
- ② なぜ「同一化」（統一）した状態から自己と対象との「分裂」は生じ、そして再び「統一」へと向うのか

以下では、①を C.G.ユングが述べる「アニマ」をキーワードに考察する。そして②をヘーゲルの言う「無限性」を手がかりに考察する。



第3節、熊楠が粘菌に見出していたもの

熊楠が好んで研究対象として選んだものは、前述したように曖昧で猥雑、非合理的なものであった（例えば幽霊、性の問題を取り上げた民俗学、食人肉の歴史など）。その最たるものが粘菌だったと言える。それを一言で言えば「アニマ」的要素を持つものと言うことができる。特に、粘菌のライフサイクルの中でも、熊楠が関心を持ったのが「原形体」の時期であった。原形体は気まぐれにその美しい色彩を変化させ（環境条件が変化すると原形体の色も変わる場合があるが、色の変化の目的は未だ不明である）、アメーバのようにドロドロと広がりながら動き、バクテリアなどを捕食する。そしてそれは突如としてキノコ状の「子実体」へと変化する。

熊楠は、特に各地を転々としたアメリカ時代、そして大英博物館に通いつめていたロンドン時代には、後世に言われるような民俗学者や博物学者というより、彼自身はむしろ自然科学者を自認していた。アメリカ時代には、『科学論文集』と名付けた抜書ノートなどを作成している。また当時ロンドンで流行っていた降霊術やオカルティズムを批判する書簡などを友人・土宜法龍へ送ったりもしている。そこには自然科学者・南方熊楠の姿を見ることができる。例えば法龍に対して以下のように、近代科学の重要性を切々と述べたりもしている。

仁者、欧州の科学哲学を採りて仏法のたすけとせざるは、これ玉を淵に沈めて悔ゆることなきものなり。小生ははなはだこれを惜しむ。

[1893年12月24日付 土宜法龍宛書簡] (『全集7』 p.149)

しかして仁者いたずらに心内の妙味のみを説いて、科学の大功用、大理則あるを捨つるは、はなはだ小生と見解を異にす。

[1893年12月24日付 土宜法龍宛書簡] (『全集7』 p.153)

では、論理的・分析的・理性的・自然科学者の思考を重視していた熊楠が、なぜ粘菌という極めて曖昧的で神秘的、気まぐれな生物に特別な関心を持ったのか。それは、熊楠が

粘菌という他者に、自身に潜む「アニマ」を見出していたからだと思われる。ユング心理学において「アニマ」とは、男性の深層心理に潜む女性的性質を言う。

ペルソナとアニマは相補的に働くものである。男性の場合であれば、そのペルソナは、いわゆる男らしいことが期待される。彼の外的態度は、力強く、論理的でなければならない。しかし彼の内的な態度は、これとまったく相補的であって、弱弱しく、非論理的である。

[河合 1967 : 197]

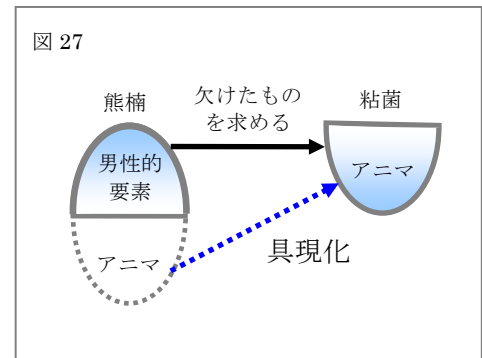
河合がこう述べるように、男性は、「男性らしさ」を強調する外的態度（ペルソナ）を持つとき、彼の内の「女性らしさ」（アニマ）によって平衡が与えられている。この外と内とをもって、全体としての彼の自己は形成されるのである。そして、その「アニマ」は、人格化されたイメージとして夢などに現れたり、実際の女性に投影されたりする。時に物事や物体がその役割を果たす場合もあるという[河合 1967 : 208 参照]。例えば、船は常に「彼女」として知られている。自動車も多くの男性のアニマの投影の焦点となる[Jung 他 1964, 河合訳 1975 : 47 参照]。また河合は、「アニマ」は男性の心の中の抑圧されたものと結びつきやすいとも述べている[河合 1967 : 202 参照]。熊楠の表面上の、もしくは彼自身が自覚していた科学的・論理的・分析的性質は、いわば男性的要素（ペルソナ）である。また熊楠は「女嫌い」を公言していた。大英博物館では、女性の甲高い声が気に食わず、それを制したことが原因で騒動を起こし、同館を追放されたりしている⁴⁾。また女兒や老女に暴力を振るうことさえあった⁵⁾。

しかし、そのような女性に対するあからさまな嫌悪感、威圧的態度こそ、彼の内面の抑圧された部分、劣等なものの裏返しでもあったと考えられる。そして熊楠の、そのような過激とも言える外面的態度の深層にあり、それと対極をなす、あるいは相補性をなす「アニマ」は、実際の女性にではなく、粘菌に見出されていた。

⁴⁾ 熊楠は 1897 年 11 月に大英博物館内でイギリス人を殴打し入館を差し止められている。翌月には復帰するが、1889 年 12 月、館内で女性の高声を制したことから再び紛争を起こし、これが決定的な原因となり同館を追放されることになった。

⁵⁾ 「……又出、家の老婆を打、巡査と争い入牢」(1898 年 11 月 17 日付日記)など、特にロンドン時代の日記には女性に暴力を振るったり激怒したりする記載が多く見られる。

男性にとって、人格化されたイメージとして夢に現れるものや、実際の女性へ投影されたものが「アニマ」であるとすると、物事や物体が同じような役割、つまり「ペルソナ」を補償する作用を成している場合、それらはいわば「アニマ」的なものであると言える。つまり熊楠にとって粘菌とは「アニマ」的なものであった。



〔図 27〕は、熊楠が粘菌に、自身の影とでも言うべき「アニマ」を見出していることを表すものである。熊楠が自身で認識していなかった「アニマ」は、「熊楠全体」の半分であり、いわば彼の「欠如した部分」、「欲望される部分」、「願望」であった。だからこそ熊楠は粘菌に並々ならぬ関心を抱いた。熊楠はそれらを対象（粘菌）に見出し、「採集」を通じて自己へ取り入れたり、あるいは「観察」を通じて対象へ自己を投げ入れたりした。そうすることで「同一化」しようとした。もしくは完全性へ向おうとしたと言えるだろう。つまり熊楠が対象として選んだ粘菌は、彼の無意識にある「アニマ」が具現化されたものだと言えるのではないだろうか。

第4節、統一と分裂

自己（熊楠）と対象（粘菌）は、同一化し、完全性（統一、同一のもの）へ向う。というより、むしろ自己と対象は「同一のもの」が「分裂」したものなので、「同一のもの」（統一）へ帰還すると言ふべきであろう。そして再び「分裂」する。以下では、この「統一」と「分裂」について、ヘーゲルの『精神現象学』における「意識」及び「自己意識」の章を基に考察を行う。

自立的な諸々の項は自分だけで〔自分に対して〕在る。が、この自分だけの有〔対自存在〕はむしろそのまま統一に反照することでもあり、またこの統一は自立的な諸々の形態に分裂することでもある。

[Hegel 1807, 檜山訳 1997 : 211]

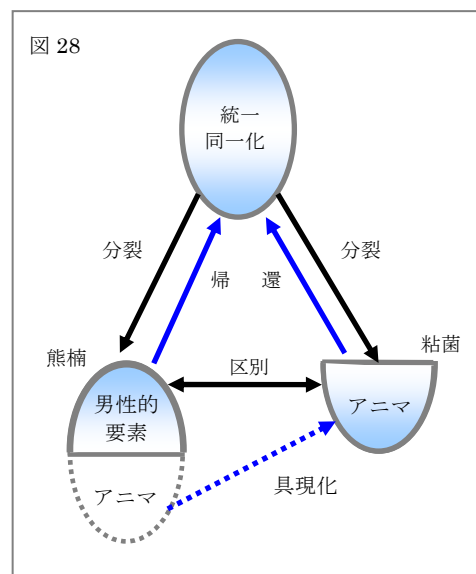
「同一のもの」が自分を二分して対立したものになる。その対立したものは各々で別々に自立して存在するよう見えるが、他方は一方のいわば「片割れ」であり、また一方は他方なくしては在り得ない。一方は他方が存在するための、他方は一方が存在するための契機である。そして他方が一方自身を含み持つという点において、両者はいわば「区別であって区別でないもの」、あるいは「何ら区別でないような区別[Hegel 1807, 榎山訳 1997: 197]」であると言える。だからこそ両者は「分裂」してもすぐ「統一」（同一のもの）へ帰還することができる。そしてこの循環は限り無く続く。熊楠はこの統一→分裂→区別→帰還→統一……の限りない循環に関連した、興味深い言葉を残している。

万物悉く大日より出、諸力悉く大日より出ること第二以下の状にて見られよ。万物みな大日に帰り得る見込みあり、万物自ら知らざるなり。

[1902年3月26日付〔推定〕土宜法龍宛書簡] (『高山寺資料』p.275)

熊楠は、大日如来から万物（熊楠、粘菌）は「分裂」し現われ、それらはまた大日如来（統一）へ帰ると言うのだ。この言葉は、熊楠の知の体系である「南方曼陀羅」の説明において、彼の言う「大日如来の大不思議」を考察していく上で重要なヒントになり得ると思われる。本章ではこのことについてはこれ以上踏み込まず、第6章で改めて考察することにする。

粘菌と熊楠は、「統一」が「分裂」したものである。粘菌は熊楠の「アニマ」（厳密には「アニマ」的なもの）であり、つまり熊楠自身の影である。否、「アニマ」なくしては、全的人格は成立し得ないのであるから、「アニマ」として粘菌は熊楠そのものであると言っても良い。粘菌は熊楠と区別されて在りながらも、それは熊楠でもあるということになる。熊楠と粘菌が同一化し、「統一」へ帰還する。そして「統一」は再び「分裂」する〔図28〕。



ではなぜ「統一」から再び「分裂」が起きるのか。

統一は、絶対に否定的なつまり無限な統一であるから、分裂する。そしてこの統一が存立であるのだから、区別もこの統一においてのみ自立性を保持するのである。

[Hegel 1807, 榎山訳 1997 : 211]

「統一」とは、言ってみれば、何かと何か等しいということ（一つになっていること）だが、それにはまず何かと何かに分かれるという「分裂」が前提としてなくてはならない。つまり「統一」が「分裂」するのは、それ自身にもともと「分裂」を含んでいるからだと言える（この「統一」は、厳密には人間が「分裂」後に希求する、いわば「人間的統一」である）。「統一」から「分裂」した各々は、前述した通り「区別なき区別」である。言い換えれば、それは「同名のものの区別であり、その本質は統一〔一つであること〕[Hegel 1807, 榎山訳 1997 : 197]」である。

熊楠と粘菌は、全く関係のないもの同士ではなく、粘菌は熊楠が無意識に持っている「アニマ」が具現化されたものであった。つまり、各々は「ある他者の反対ではなく、純粹の反対[Hegel 1807, 榎山訳 1997 : 199]」ということである。そして熊楠が求めた同一化とは、彼の絶対に否定的なもの、つまり自己を完全に否定（区別）した相補性を成すもの（＝表面上の熊楠とは正反対の「アニマ」的なものとしての粘菌）との「統一」であった。

「統一」は、区別がなければあり得ないものである。逆に「統一」があるからこそ区別項が成り立つとも言える。「統一」と区別は循環し完了することはない。「統一」は区別項の本質とでもいうべきものだから、「統一」がなければ区別項は存在しないと言える。また「統一」は区別項が希求する理想でもある。逆に理想を希求するために区別項が成り立つ、つまり「分裂」が生じるとも言える。

熊楠は粘菌と同化することを求めていた。なぜならそれが彼の無意識にある「アニマ」であったからだ。そしてそれを取り込むこと、あるいはそれに自身を投げ入れることで、熊楠は安定した理想の自己（完全性）へ帰還しようとしていた。また、求めるべき完全性あるいは「統一」のために、熊楠と粘菌は存在し得た。

「同一化」は理想である一方、恐れるべきものでもある。熊楠が自分の欠けている部分

を見出し、粘菌を取り込んだり（取り入れ同一化）、粘菌へ自分を投げ入れたり（投影同一化）して、完全に同一化すれば、粘菌という対象は消えてしまう。対象が消えるということは、主体としての熊楠が消えることでもある。なぜなら対象があつての主体だからである。主体の無化は人格の死であり、それは熊楠がもはや熊楠という人格を失った「狂人」になることを意味する。では、分離した状態が「常人」ということになるのであろうか。しかし熊楠は分離した状態でも、つまり「採集」や「観察」に没頭していないときでも、「奇人」・「変人」と呼ばれていた。これはどういうことであろうか。

第5節、近さと遠さ

「気に入らないものには反吐を吐きかけた」、「大英博物館内で暴力事件を起こした」⁶⁾など、熊楠の奇人伝は数多くある。なぜ熊楠はこのような「逸脱」した行為をとったのか。

「逸脱」とはつまり他者との「距離」が極端に離れてしまうことである。それは他人の気持ちに鈍感になり感情移入ができなくなり、そしてその結果、反社会的行動へつながらることになる。極めて自己中心的・自己愛的（narcissistic）になるとも言えるだろう。特に熊楠の暴力的「逸脱」行為は、他者への共感力の欠如を感じさせる。また彼の日記の記述には、このような行為に対して反省・自戒の言葉は一切見られず、むしろ「自慢」しているかのようにさえ感じられる⁷⁾。またこのような「逸脱」が集中して見られる時期には、熊楠の日記からは「あれほど多かった植物採集にかんする記載がぷつぷつとなくなる[近藤1996:101]」のだ。

我々は通常、対象といわば「適当な距離」を保っている。対象と何かしらの関係を持つことが可能な近さにいながらも、それは完全にその対象と一体化してしまう程、近いというわけではない。また主体が対象に働きかけても、全く反応を示してくれないときや、対

⁶⁾ 特に、ロンドン時代後期の日記には、彼の病的なまでの過剰な憤怒・暴力行為が見られる。「チャイナマン」とある女兒からからかわれ、この女兒を傘で殴る(1900年5月8日付日記)など、多数の騒動を起こしている。

⁷⁾ 精神医学の見地から熊楠を分析している近藤俊文は、
明治30年4月28日には、ロンドン寄港中の軍艦富士のふるまいに酒に酔った熊楠は、女性が嘲笑したとして、暴力をふるったあげく、警察署に留置される。留置されてもお暴れて、巡査をてこずらせた、と書いている。なにか、それを自慢しているかのようにも読める。

[近藤1996:101](傍線一唐澤)

と述べている。

象が全くどうにも主体の思い通りにいかないとき、主体は対象から離れ、独立あるいは孤立していると感じる。しかし独立し対象と離れているとはいえ、その対象に働きかけることができるだけの近さにいる。これがいわば「適当な距離」であり、この微妙な距離を保つことが「正常」・「健全」と言われる。熊楠はこの「距離」が非常に極端だったと言える。粘菌などの対象と同一化してしまうほどの近さにいるかと思うと、今度は、「奇人」・「変人」と呼ばれるほど、他者から遠く、「適当な距離」から「逸脱」した行為をとった。

熊楠の「在り方」は、離人症的だったと言えるかもしれない。⁸⁾ 木村敏によると、離人症患者は、「物が苦痛なほど近くて自分を支配する[木村 1963, 著作集 1 2001 所収: 14] (傍点一唐澤)」感覚と「物がひどく遠くて世界が疎隔され[木村 1963, 著作集 1 2001 所収: 14] (傍点一唐澤)」ている感覚に苛まれるという。そしてそのような極端な「近さ」と「遠さ」は自己の消滅、人格の死という「不安」を引き起こす。

また統合失調症（精神分裂病）では、患者は極度に「この『近さ』に対して恐れを抱くようになるという[木村 1970, 著作集 1 2001 所収: 248 参照]。その理由を木村は以下のように述べている。

【統合失調症者による「近さ」に対して恐れを抱いた結果としての自閉は】自分自身が絶えずそこから自分にならねばならぬところの場所、つまり以前われわれが「気」の領域⁹⁾と呼んだところの自他の絶対的同一の場所からの自己遮断の試みの表現なのである。

[木村 1970, 著作集 1 2001 所収: 248] (【 】内一唐澤)

つまり患者は、自己と他者の「統一」状態=自他の絶対的同一の場所（そこにはもはや自己も他者もない）へ帰還してしまわないように、自己を遮断（自閉）するということで

⁸⁾ 熊楠は「癲癩」だったと言われているが、その症状の特徴には、例えば「対人的な距離を置かない馴れ馴れしさ[木村 1982, 著作集 2 2001 所収: 235]や「離人症様の現実疎隔感[木村 1982, 著作集 2 2001 所収: 227]」などがあるという。その他にも「癲癩」の特徴は多々あるが、本稿ではそこまでは踏み込まない。また筆者は、熊楠と対象の関係や彼の天才的能力の全てを「癲癩」という脳の疾患だけに帰すつもりもない。脳の構造に全てを還元し特殊化し疎隔するのではなく、熊楠と対象の関係の在り方、その意味を、我々の側に引き寄せて考えることこそが重要であると考えられる。

⁹⁾ 木村は、「自分のことが自分のことでありながら同時に相手のことであり相手のことがそのまま自分のことでもあるような領域」のことを、「日本語で『気』という言葉で表わされている領域」と呼ぶ。[木村 1970, 著作集 1 2001 所収: 222 参照]

ある。「統一」の場所へ帰還すること、自己と他者が完全に同一化してしまうことは自己が消滅してしまうことを意味する。そこで患者は極度に自閉し自己を守ろうとする。その結果、カウンセラーが患者に対峙した際、「患者との内的な一致を妨げる障壁」や「奇妙な独特な感じ」あるいは「とりつくしまがない」[木村 1970, 著作集 1 2001 所収: 248]といった印象へとつながるのである。

熊楠は「狂人」にならないために、「採集」や「観察」を行った。そして集中して「採集」・「観察」を行うことで、対象と極端に近くなった。瞬間的には対象と同一化していたかもしれない。しかし、永くはその状態には留まらなかった。なぜなら、同一化の状態に留まることは、自我の消滅・自己の無化・人格の死であり、それはつまり熊楠が恐れた「狂人」になってしまうことを意味するからである。そこで再び熊楠は対象との「距離」を採る（分離する）ことになる。しかし近すぎた「距離」は、今度は逆に非常に遠くなってしまふ。それは「狂人」を恐れての反動だったのかもしれない。つまり、熊楠の場合、対象と再びすぐに同一化（狂人化）してしまうかもしれないから、対象からできるだけ遠くに離れて「安全」・「健全」・「健康」な状態を保とうとしたのではないだろうか。あるいは熊楠の、自己が消えてしまうことへの「不安」が、自我を極端に強固なものにしようとしたために、彼を「統一」状態からも他者からも遠く離れさせたとも言える。つまり（油断をすると近づきすぎてしまう距離からの）「逸脱」は、熊楠にとって自我を確保せんがための狂奔でもあった。極端に自我を保持しようとすることは、他者との関係において「障壁」を設けることになり、結果、「適当な距離」を採れなくする。他者との間の「壁」が厚くなることは、当然他者への同一化を妨げ、「統一」状態への帰還も難しくする。

熊楠は他者から極端に離れてしまうため、彼の行為は「奇人」・「変人」的なものになってしまった。そしてあまりにも離れすぎた「距離」に自ら気づき¹⁰⁾、それを埋めるため、そして完全な自己像を求めて再び「採集」・「観察」へのめりこむ……。このような繰り返しが熊楠の生き方には見られるのである。

我々は普通、この「距離」をほぼ一定に保っている。「距離」とは、いわば我々の生きている文化が決定するものである。アニミズムやトーテミズムを信仰する文化における自己

¹⁰⁾ 「…自分このことに気がつき…」[1911年10月25日付柳田国男宛書簡]([全集 8]p.211)とあるように、熊楠は離れすぎた自分の位置をかるうじて自覚できる「距離」にいた。もし熊楠が完全に他者から離れてしまっていたら、そこにはもはや他者だけではなく自己(熊楠)も存在しない、いわば「狂人」の領域に入ってしまっただろう。

と対象の「距離」のあり方と、個人主義、科学技術重視の文化におけるそれとはやはり異なる。

熊楠が天才・超人と呼ばれる所以は、この「距離」の振幅の大きさにあると思われる¹¹⁾。つまり他者との「距離」が極端に離れることによって、「逸脱」した思考・他者に囚われないう斬新な考えを生み出すことができ¹²⁾、極端に近くなることによって、他者（自己）を内部から直観することができた。「適当な距離」をなかなか置くことができなかつた熊楠は「狂人」になることを恐れたが、このラジカルな「距離」の置き方こそ、南方熊楠という人物を最も特徴付けていると言うこともできる。

熊楠は常に極端な「距離」にありながらも、死ぬまでかろうじて「狂人」にはならなかつた。完全な「同一化」と絶対的な「遠さ」は、両方とも自己の無化・他者の消失を意味する。熊楠は常に「狂人」と隣り合わせにいたが、それでも彼は、生涯自分を完全に見失うということではなかつた。熊楠は「狂人」を恐れ、またいつ自分がそうなってもおかしくないと思っていた。自らがいつも「狂人」と隣り合わせにいることを自覚していた。しかし現実になつたのは、熊楠ではなかつた。彼の愛息・熊弥が統合失調症という形で体現してしまうことになる。それは熊楠にとって耐え難い悲しみであつたに違いない。

もし熊楠が「狂人」になることを恐れていなかつたら、自我の消滅・人格の死を本当に忌避していなかつたら、彼は那智山から下りてくる必要はなかつただろう。ひたすら人との接触を避け、「採集」・「観察」に没頭すれば良かった。しかし熊楠は突如として下山し、以後田辺に定住する。彼が深山幽谷の那智山から「さびしき限り¹³⁾」の生活を切り上げ下山した理由は、しばしば熊野での「植物調査が完了したため¹⁴⁾」だと説明される。しかし

¹¹⁾ 神坂次郎は

天衣無縫ともいべき熊楠の行動は、振幅が大きい。いま先刻まで腰巻ひとつの半裸で狂気のように研究に打ちこんでいたかと思うと、こんどは浴びるほど酒を飲み、ふらつと採集にでかけたまま十日も二十日も帰ってこない。たまに帰ってくると、家じゅうにばらばらしらみ風を落として歩く……

[神坂 1987:311](傍線一唐澤)

と熊楠の特徴を述べている。

¹²⁾ 有名な「神社合祀反対運動」は、彼のいわば「逸脱」した行動・思想の表れでもあつた。この運動において熊楠は「エコロジー」という当時の日本においては極めて斬新な考え方を表した一方、家宅侵入・暴行罪のかどで数日間拘留されたりもしている。

¹³⁾ 1925年1月31日～2月2日の矢吹義夫宛書簡(いわゆる「履歴書」)において熊楠は、

かくて小生那智山にあり、さびしき限りの生活をなし、昼は動植物を観察し図記して、夜は心理学を研究す。

(『全集 7』p.31)

と那智山での暮らしぶりを振り返っている。

¹⁴⁾ 例えば、中沢新一は

実際は、熊楠は、これ以上那智山に独居することに、自我崩壊の危険を感じたからではなかっただろうか。

那智山に籠ること二年ばかり、その間は多くは全く人を避けて言語せず、昼も夜も山谷を分かちて動植物を集め…（中略）…那智山にそう長く留まることもならず、またワラス氏も言えるごとく^{サイキアトリ}変態心理の自分研究ははなはだ危険なるものにて、この上続ければ^{じるし}キ印になりきること受け合いという場合に立ち至り、人々の勧めもあり、終にこの田辺に来たり……（以下略）

[1911年6月10～18日『和歌山新報』掲載『千里眼』]（『全集6』pp.7-10）

那智山隠栖の後期（1904年頃）、熊楠の精神は極限状態にあった。熊楠が那智山でこれ以上研究を続けることは、精神の崩壊・自己の「死」、つまり狂人になること（キ印になりきること）を意味した。孤独に「採集」・「観察」を続けていくうちに、熊楠は研究対象である生物と一体化し、自分の存在が薄れていくのを感じていた。あるいは他人との接触がほとんどなかったため、自己存在を自覚できなくなってしまっていたのかもしれない。

熊楠が下山した真の理由は、植物採集が完了したためという単純なものではなく、自分が同化し溶け込んだ生物あるいは森全体から分離し、自我を保つためだったと考えられる。

※

熊楠は、好んで自分の肖像写真を撮った。その数は膨大である。なぜ熊楠はここまで多くの自分の写真を撮ったのか。特に上半身裸でたばこをくわえながら腕組みをして写っている写真（林中裸像）〔写真11〕〔中瀬・長谷川 1990：118〕や、浴衣を表裏逆に着て写っている写真〔写真12〕〔中瀬・長谷川 1990：152〕などは、彼の自己主張のようなものが感じられる。熊楠は自分の写真を撮ることで、自分の存在を確認しようとしたのではないだろうか。常に自己の消失と隣り合わせだった彼は、自分の肖像写真を撮ることで、自己存在を顕在化しようとしたのかもしれない。

明治37年(1904年)9月30日、熊楠の熊野植物調査は完了し、いよいよ彼は山を降りると述べている。 [中沢 1992:43]

本章では、熊楠の「採集」・「観察」行為を「取り込み同一化」・「投影同一化」と比較して述べてきた。それらの行為は熊楠自身が述べるように、彼が「狂人」にならないための、そして不安定な自我を守るための、いわば「防衛機制」であった。熊楠は対象との「同一化」を求めていたと言える。「採集」は自己へ対象を



写真11 いわゆる「林中裸像」(明治43年)
(中瀬喜陽・長谷川興蔵編、『南方熊楠アルバム』、八坂書房1990、p.118)
画像提供：南方熊楠顕彰館

取り込むことによる、「観察」は対象へ自己を投げ入れることによる「同一化」であった。そして熊楠が選んだ対象は、彼の「純粋な反対」、彼の欠如した部分を持つものであり、いわば彼自身であった。例えば粘菌、特に原形体は熊楠の「アニマ」を具現化したものであったと言える。否、粘菌に限らず、熊楠がその研究対象に選んだものは全て、いわば「アニマ」的なものであった(幽霊、カニバリズムの歴史、迷信・俗信など)。熊楠の、研究対象に対する在り方には、「フェティシズム *Fetishism*」を見出すことができる。ある男性(女性)が特定の物体や女性(男性)の身体の一部に性的魅力(頭では理解できない程、強力に惹きつけられる力)を強く感じ、それらに特に執着する在り方が、フロイトの言う、いわゆる「フェティシズム」であるが、熊楠の研究対象に対する在り方は、まさに「フェティシズム」を表している。対象へと向かわせる、対象へ「潜入・内在化 *indwelling*」してしまう程のめりこませる、いわば「生(性)のエネルギー」とでも言うべきものが、熊楠とその研究対象(特に粘菌)の関係には、如実に見てとることができるのである。我々は、そのエネルギーが異性の性器へ向かうことを「正常」とし、それが「他のもの」へと向かうことを「異常」とし、そのような性向を持つ人を「異常者」(フェティシズム性向者)とする。しかし、自身に欠けたものを求め、「統一」を目指そうとする点においては、両者の構造は同じである。少し言い方を変えるなら、異性が「アニマ」であり、異物が「アニマ」的なもの(第2章・第7節及び本章・第3節参照)であるだけであり、その「在り方」に



写真12 高野山にて(大正11年)
なぜか浴衣を表裏逆に着て写っている
(中瀬喜陽・長谷川興蔵編、『南方熊楠アルバム』、八坂書房1990、p.152)
画像提供：南方熊楠顕彰館

違いはない。そもそも、人間が何か（異質なもの・自分以外のもの）に向かうということは、この構造において説明されるはずである。向かう対象が異性の性器か、或るものであるかの違いであって、その内実は同じである。熊楠の場合、向かう対象の一つが「粘菌」（「アニマ」的なもの）であったのであり、両者の在り方は、人間が或る対象へいかにして向かうのかを端的に表していると言える。

欠けた部分を補完して「一」へ帰還しようとすることは、一種の「防衛機制」であるが、完全に「一」へと帰還することは、自我の消滅・自己の死でもある。なぜなら、対象と同一化し完全性（一）を取り戻すことは、対象の消失を意味し、対象が消失した場において主体だけが存在することはあり得ないからである。

「同一化」は、自己の欠けた部分を補完する点においては理想とされるべきものであるが、それには自我の消滅・人格の死が伴うという点で、恐れるべきものでもある。熊楠は対象と完全に同一化していたのではなく（瞬間的には同一化していたかもしれないが）、同一化に極めて近い「距離」にいたと言える。それは「狂人」になるのではないのかと、逆に熊楠を「不安」にさせた。そこで再び対象と「距離」を採った（分離した）。しかし、熊楠は対象との「距離」の採り方が非常に苦手であった。彼の様々な「逸脱」した行為がそれを物語っている。他者からあまりに「逸脱」した行為をとるために彼は「奇人」・「変人」と呼ばれた。しかし「狂人」ではなかった。熊楠はかろうじて「奇人」・「変人」に留まっていた。しかし、何かの拍子で「狂人」へ移行してしまう可能性は十分あった。それを防ぐために、熊楠は再び「採集」や「観察」に全精力を費やしたのだった。そして彼の驚異的な集中力による「採集」・「観察」は、対象との「距離」を極めて近くした。また、その対象として選ばれたものは、自らの欠如した部分を持つ、あるいは熊楠自身を補完してくれるものであった。そして欠如した部分を補い「完全性」を求めて「採集」・「観察」に没頭した。このような循環を熊楠の生き方に見ることができる。

熊楠が、森の中でくわえたばこに裸で腕組みをしている写真〔写真 11〕（林中裸像）と、縁側で眼鏡をかけて一心不乱に菌類を写生している写真〔写真 13〕〔中瀬・長谷川 1990 : 112〕を見比べてみると、本当にこれが同一人物かとさえ思えてくる。しかしこの二つの写真は熊楠という人物を最も象徴的に表している。一方は豪快で何にも囚われない奔放な熊楠像を、一方は観察対象に入り込もうとする繊細で神経質な熊楠像を表している。

熊楠と対象との係わり合いを深く考察していくとき、これまで多くの書物等で語られ、そして我々の多くがイメージするようになった、彼に対する「強靱な精神を持った森の巨人像」とは全く正反対の、「狂人」を恐れながらも常にその近くにいることしかできなかった「不安定な自我の持ち主」という一面が見えてくるのである。



写真 13 一心不乱に菌類を写生する熊楠（昭和6年）
（中瀬喜陽・長谷川興蔵編、『南方熊楠アルバム』、八坂書房 1990、p.112）
画像提供：南方熊楠顕彰館

熊楠は、常に自我の消滅・人格の死と隣り合わせにいた。それは熊楠にとって苦しみでもあっただろう。しかしそれが彼を極めて特異で魅力的な人物にしていることも確かである。

柳田国男は熊楠を「日本人の可能性の極限」と評した。「可能性の極限」とは、言い換えれば「自己の消滅の限界」のことでもある。つまり自己を失わずにどこまで対象と近づくことができるか、あるいは離れることができるか、それが人間としての可能性を発揮できる限界だと思われる。自己を失わずに、自己と対象が完全に消えてしまうギリギリ限界まで近づき、もしくは限界まで離れることができたとき、「通常」の見方を超えた見方・考え方・行為ができると思われる。そしてそれができた人物こそ、まさに「南方熊楠」だったのである。

※本章は、早稲田大学大学院社会科学研究所『ソシオサイエンス No.15』（2009年3月）掲載『南方熊楠の採集・観察に見る対象との同一化について—粘菌との関係を軸に一』を、加筆修正したものである。

参考文献

- ・飯倉照平・長谷川興蔵編、『南方熊楠百話』、八坂書房、1991
- ・氏原寛・小山捷之・東山紘久・村瀬孝雄・山中康裕・山本格、『心理臨床大事典』、培風館、1992
- ・小此木啓吾、『フロイト思想のキーワード』、講談社現代新書、2002

- ・河合隼雄、『ユング心理学入門』、培風館、1967
- ・木村敏、「離人症の現象学」、1963（『木村敏著作集 1 初期自己論・分裂病論』、弘文堂、2001 所収）
- ・木村敏、「自覚の精神病理」、1970（『木村敏著作集 1 初期自己論・分裂病論』、弘文堂、2001 所収）
- ・木村敏、「時間と自己」、1982（『木村敏著作集 2 時間と他者／アンテ・フェストゥム論』、弘文堂、2001 所収）
- ・神坂次郎、『縛られた巨人 南方熊楠の生涯』、新潮文庫、1987
- ・近藤俊文、『天才の誕生—あるいは南方熊楠の人間学—』、岩波書店、1996
- ・鶴見和子、『南方熊楠—地球志向の比較学—』、講談社学術文庫、1981
- ・中沢新一、『森のバロック』、せりか書房、1992
- ・中沢新一・長谷川興蔵、「南方学の基礎と展開」、1992（『新文芸読本 南方熊楠』、河出書房新社、1993 所収）
- ・中瀬喜陽・長谷川興蔵編、『南方熊楠アルバム』、八坂書房、1990
- ・Blacker, Carmen／邦訳：高橋健次「南方熊楠 無視されてきた日本の天才」、英国民俗学会機関紙『フォークロア』94 巻 2 号、1983（飯倉照平・長谷川興蔵編、『南方熊楠百話』、八坂書房、1991 所収）
- ・Hegel, G. W. F. *Phänomenologie des Geistes*, 1807／邦訳：檜山欽四郎、『精神現象学（上）』、平凡社、1997
- ・牧野富太郎、「南方熊楠翁の事ども」、1942（飯倉照平・長谷川興蔵編、『南方熊楠百話』、八坂書房、1991 所収）
- ・松居竜五・岩崎仁編、『南方熊楠の森』、方丈堂出版、2005
- ・山本幸憲、「変形菌研究と南方熊楠」、2005（松居竜五・岩崎仁編、『南方熊楠の森』、方丈堂出版、2005 所収）
- ・Jung, Carl Gustav・Franz, M.-L. von・Henderson, Joseph L.・Jacobi, Jolande・Jaffé, Aniela, *MAN AND HIS SYMBOLS*, 1964／邦訳：河合隼雄、『人間と象徴—無意識の世界—（下）』、河出書房新社、1975